



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |  |
|------------------|--|
| Title            | 祝「北の縄文」世界遺産登録：北海道における縄文遺産の展開戦略を考える   |
| Author(s)        | 青野, 友哉; 小野, 哲也; 西山, 徳明 他   |
| Description      | 2021年度オンライン観光創造フォーラム. 2021年10月15日. オンライン. 北海道大学観光学高等研究センター.  |
| Relation         | 観光創造フォーラム2021講演録 / 山村高淑 編<br>Proceedings of Tourism Creation Forum 2021 / Edited by Takayoshi Yamamura |
| Citation         | CATS 叢書, 16, 1-38  |
| Issue Date       | 2022-03-31   |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/84836">https://hdl.handle.net/2115/84836</a>                      |
| Type             | departmental bulletin paper  |
| File Information | CATS16_2.pdf   |



## 祝「北の縄文」世界遺産登録

### ——北海道における縄文遺産の展開戦略を考える——

青野 友哉

東北芸術工科大学 准教授

小野 哲也

標津町ポー川史跡自然公園 園長

西山 徳明

北海道大学観光学高等研究センター 教授

岡田 真弓

北海道大学観光学高等研究センター 准教授

#### 1. はじめに

##### 1-1 あいさつと趣旨説明

司会 (岡田真弓) : このたびは、北海道大学観光学高等研究センター主催オンラインフォーラムの第 1 回にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。これより第 1 回オンラインフォーラム「祝! 『北の縄文』世界遺産登録——北海道における縄文遺産の展開戦略を考える——」を始めたいと思います。まず北海道大学観光学高等研究センターの西山教授から今回の趣旨説明をいたします。

西山: こんにちは。皆様お仕事でお疲れのところ、また週末にもかかわらずこのフォーラムにご参加いただき、心より感謝申し上げます。

実は、このコロナ禍の中、我々大学としてどのように日頃の研究活動を発信していくことができるかを考えるなかで、私ども観光学高等研究センター「CATS=Center for Advanced Tourism Studies」では、今年度からオンラインで観光創造のフォーラムを開催することとなりました。いろいろな研究者の方や実践家の方、さまざまな市民の方々も交えて、オンラインでフォーラムを不定期に開催しようというものです。教員がそれぞれ自分の発意で、皆さんにお伝えしたいことをフォーラムとして企画していくという、あまり堅苦しくない形で実施します。企画が整うたびに CATS のホームページ、私どものセンターのホームペー

ジで皆さんにお知らせし、参画をお願いします。今日ご参加いただいている方々には、基本的にはメーリングリストに記載させていただき、新しい情報はお伝えできるようにしたいと考えていますが、基本はセンターのホームページでさまざまな情報をお伝えしていきます。

本日の第1回は、私、センターの西山と岡田先生とで担当させていただいています。私のバックグラウンドは建築学の都市計画で、観光と遺産マネジメントということをして専門として研究活動が続けているところです。今回は、本年、令和3年7月に「北海道・北東北の縄文遺跡群」、通称「北の縄文」がユネスコの世界遺産に登録されましたので、この登録を祝し、それに関わることで、皆さんが「北の縄文」の登録に関してちょっと気になっていることや、これからどうなっていくのだろうかと思っているようなことを、我々なりにまずは想定し、考古のご専門であり一線で大活躍しておられますお二方の先生をお招きして議論を進めていきたいと思えます。

## 1-2 議論のポイントと流れ

**西山:** このフォーラムを通じて皆様と共有したい、勉強したい内容の大きなポイントの一つは、「北の縄文」として全部では17遺跡ですが、北海道では7つの遺跡が登録されています。しかし、なぜ道南の方にばかりあるのでしょうか。千歳より以西ばかりです。後ほどいろいろお話もあると思いますが、北海道には非常に多くの縄文遺跡がありますし、もちろん全国にもあります。そういう遺跡の中から、なぜこういうものが選ばれて世界遺産になるのか、というようなことについての素朴な疑問に対し、多くの方が不思議に思っておられると思えますので、そのことに関しまして、まずは専門の先生から伺いたいということです。

それからもう一つのポイントは、世界遺産になったわけですから、縄文遺跡というものに深い興味を持つツーリストが世界中から北海道に今後押し寄せてくるということになると思えます。そういう方々をどう受け入れ、招き入れてもてなしながらも、北海道のこの世界遺産にとどまらないさまざまな遺跡の文化遺産の魅力を発信していくのかということ、みんなで考えていく足がかりになればということ、これが2つ目の大きなテーマとして設定させていただいているものです。

次に本日の全体の流れについてです。まず、基調講演といたしまして東北芸術工科大学の考古をご専門とされる青野友哉先生に基調講演をいただきます。その後、パネルの方に移りまして、今度は標津町のポー川史跡自然公園の園長をしておられます小野哲也先生にパネラーとして加わっていただき、道東の縄文の魅力等についてご説明をいただきます。その上で、パネルでは、参加いただいている視聴者の方々からのQ&Aのご質問を軸にしながら、みんなで議論していくことができたらと考えています。多くの方にご参加いただいていますので、ご発言をしていただくとなかなか2時間という時間に収まりませんので、大変恐縮ですがQ&Aの方にどんどん書き込んでいただいて、最後のほうでなくても結構ですか

ら、思うたびに質問等があったら書き込んでいただきまして、私どもに送ってください。お一方から複数の質問いただいても構いません。もちろん、時間の関係がありますので全てのご意見、コメント、ご質問等にお答えできないかと思えますけれども、なるべく皆さんと意見を交換し合いながら基本 2 時間を前提としまして、これからフォーラムを展開させていただきたいと思えます。

それでは、最初に基調講演をお願いしたいと思います。岡田先生から青野先生のご紹介をお願いいたします。

## 2. 基調講演：『北の縄文』の世界遺産登録の意義と北海道のアピールポイント

岡田：本日ご登壇いただきます東北芸術工科大学の青野友哉准教授のプロフィールをご紹介します。青野先生は北海道小樽市でお生まれになり、明治大学文学部を卒業後、伊達市教育委員会学芸員として北黄金貝塚を中心に縄文時代の葬墓制や儀礼、生業、そして北海道を含む北方文化交流史の研究を深められました。伊達市噴火湾文化研究所在籍中の 2011 年に北海道大学大学院を修了し、博士号を取得されています。その後 2019 年から現在お勤めの東北芸術工科大学で教鞭を執りつつ、引き続き、縄文研究に取り組まれています。それでは青野先生、ご講演よろしくをお願いいたします。

### 2-1 本日の内容について

青野：皆さん、こんにちは。東北芸工大の青野と申します。参加者の皆さんのお名前を見ると、北海道の方が多いいのかなという気がします。でもオンラインですので、全国各地から参加されているかもしれませんね。今のご時世、直接会えない不便さがありますが、遠隔地からも参加できる便利な部分もありますので、今日は皆さんの前でお話できることを非常に楽しみにしておりました。

私は、ご紹介いただいたように 3 年前までは北海道の伊達市にいました。今回、世界遺産登録になりました 17 の縄文遺跡群の内一つ、北黄金貝塚の発掘調査から史跡整備、そして世界遺産登録まで関わってきました。今は山形から北海道・北東北の縄文遺跡群を応援する立場ですが、その前までは自身がずっと関わってきた遺跡だということもあり、今日は講演に呼んでいただいたと思っています。

今日お話しするのは、世界遺産登録になりましたが、これからいろいろな活用という部分も出てきますし、全国に縄文遺跡はありますので、その辺が今後どう整理されていくのかということも関心事だと思います。「世界遺産登録とその後」ということでお話できればと思います。

私は、『北の縄文』の世界遺産登録の意義と北海道のアピールポイント」として話をします。話の流れは、まず世界遺産になった価値、縄文遺跡の価値というのはどういうところなのかというおさらいをします。この辺をご存じないと話が分からないということもあると思いますので、少し厚めに話をしたいと思います。そして、世界遺産登録後の流れということで、北海道・北東北だけではなく全国に多様な縄文文化があるのだよということ、これはご存知の方が多いと思いますが、改めてお話をします。そして、今回は北海道の皆さんが多いと思いますので、今後、北海道の縄文遺跡群を活用していくときに、大きな売りになる部分があると思っています。それは、日本列島の中に、大きな文化区分という文化の境界がいくつあるのですが、その一番大きなものが、私は北海道の石狩低地帯にあると以前から思っていました。この道東と道南西部の文化の違いこそが、今後、道南だけにある世界遺産というものを超えて縄文遺跡群の価値を伝え、そして活用していくという時の大きな武器になると思っています。この点を生かすための発信の方法を考えるということでもあります。4番目に、それは世界遺産だけに縛られずに、時代的にも地域的にも超えた活用の戦略というのが必要だろうということです。つまり柔軟な活用戦略ということが大事だという話をしたいと思っています。

## 2-2 縄文遺跡の世界的価値とは何か？

青野：まずは、基本的な世界遺産の構成資産はどこかな、どんな遺跡かな、という話をしたいと思います。ここにあるのは世界遺産登録された17の構成資産と、参考の資産です（スライド①）。一番古い遺跡として、青森県の大平山元遺跡があります。そして垣ノ島遺跡、そして有名な三内丸山遺跡。皆さんは何度か足を運ばれたことがあるのではないのでしょうか。それから、岩手県の御所野遺跡、そして関連資産となっていますけども、私は世界遺産だと思っている鷲ノ木遺跡を紹介しています。その他にも、本州にはいくつものストーンサークルがあります。これらの構成資産のどこに価値があるのでしょうか。おそらく世界遺産となるということは、世界的な何か価値があるのだろうということは想像がつかます。この青森・秋田・岩手そして北海道の4道県が世界遺産を目指したときに、どういうところで訴えていけばいいのかということを約10年間議論したわけです。そして、推薦書素案というものを作りまして、国からユネスコへ正式な推薦書が提出されました。そのときの整理の仕方は、やはり定住する狩猟採集文化としての縄文の特異性を訴えて行こうということになったわけです。今スライドで映しているのは、世界史の教科書です。高校生は、これで人類史を習うわけです。教科書には「人類史は狩猟・採集を中心にした獲得経済から農耕・牧畜による生産経済に移るという重大な変革をとげた」と書いてある。そして、「その結果人口は飛躍的に増え、文明の発展の基礎が築かれた。そして農耕牧畜が始まると、人類は集落に



スライド ①



スライド ②



スライド ③

住み・・・」と続くわけです。つまり世界史の教科書では、狩猟・採集社会というのは移動の社会なのだ。そして、農耕・牧畜が始まって初めて定住したのだ、ということが書かれています。世界史の常識として教科書に載っているわけです。もちろん例外はあります。ただ、ユーラシア大陸の大多数の文明が生まれたと言われる地域では、このように狩猟・採集の移動生活から農耕・牧畜の定住が始まり文明化が進行したのだ、そういう説明がなされているわけです。しかしこの日本列島は、島国ということもあって、それからユーラシア大陸からやや離れていたということもあって、特異な発展をとげました。この定住する狩猟採集文化、これが非常に稀であったということなのです。それを今日は具体的にお話をしていきます。

狩猟採集民というのは、獲物を追って移動していくもの、日本であっても、旧石器時代はそういう生活であったと言われていています。それが定住したというのには、どこに証拠があるのか、ということなのです。一つは土器の発明が定住の証拠だというのは考古学者の小林達雄先生が言われています。つまり大きな土器をいつも携えて移動していることはない、ということです。土器が誕生した時点から定住ということは考えていいのだ、というのが小林先生の考えです。ただし、定住といっても段階がいろいろあります。それは、時々行っては帰ってきてという繰り返しも考えられます。土器やそれから重たい石皿やすり石というのは、持ち運びができないとすれば、置いていけばいいという考え方もあるわけです。ですので、ひと所に拠点はあるのだけれども、よそを転々としてまた戻ってくるということも、定住のあり方としては考えられる。しかし、北海道・北東北の縄文遺跡群は通年、つまり四季を通じた定住だという証拠があるのです。それは北黄金貝塚や入江・高砂貝塚のような大規模な貝塚です。ちなみにイヌイットなどの狩猟採集民というのは、夏と冬で住む場所が違うわけですが、そのような生活とは一線を画するものなのだということが貝塚の中を見るとわかります。

それからもう一つ、貝塚は1万年間にわたる自然環境の変化に適応した証拠だということが言えます。貝塚の中からは、当時の環境の変化が分かる動植物が出土します。さらには、貝塚の位置の変化ということも海水面の変化と連動した姿を見せます。それから縄文人が作った釣り針や銛といった獲物を獲るための道具も、当時の自然環境の変化と関連しています。ですので、自然環境が変わり動植物が変化すると、それに合わせて道具も変化します。そういう生活や文化であることが、貝塚出土の骨角器などから分かるということです。北黄金貝塚のC地点という所の貝層断面を見ると1メートル以上の非常に厚い貝塚が残っています(スライド②)。この中で灰色に見えるのは、土ではなくてウニなのです。ウニの殻がずっと厚く堆積していますし、ホタテガイやマガキといった貝類、そしてクリーム色に見える部分は魚・エゾシカ・オットセイの骨です。こういうものが土壌の堆積する間もなく積み重なっています。ウニを採った時期はウニの旬にあたり、噴火湾で言えば夏です。動植物、特に魚などは季節が非常に明確に分かります。それはなぜかと言うと、産卵の時期というのは、魚は岸に寄ってくるのです。ニシンは春ですよ、群来というのが北海道では見られま

す。縄文人は、現在と違って深い所の魚を獲るといことはできませんので、海岸に寄ってきた魚を獲る。つまり旬のものを獲っている。貝層は季節を表しているということになります。貝塚の中から出てくる魚種の産卵時期を調べれば獲った季節が分かるということです。そうすると、噴火湾でいうとニシンは春、ウニは夏、アイナメは秋、マダラやアンコウは冬といったように、季節が積み重なっているということが分かります。ということは、定住がオールシーズンだったということを示すわけです。ですから、定住型の狩猟採集民、これが世界的には稀なわけですが、その証拠がこの貝塚の貝層なのだということがご理解いただけるかと思います。ちなみに、定住というのは知識の蓄積が起り、そして文化の成熟が起こったのだ、という重要な指摘もあります。

そして北黄金貝塚では 1000 年間この貝塚が作られるわけですが、縄文時代というのは 1 万年間継続しているわけです。北黄金貝塚ひとつだけで世界遺産になれるかということ、10 分の 1 しか定住を示していないということになりますので、なれません。そこで他の遺跡とも組み合わせると縄文時代全体の定住ということを明らかにする。それが複数の遺跡を組み合わせると世界遺産登録を目指した理由です。これをシリアルノミネーションと言いますけれども、17 の遺跡がそれぞれ時代や性格、異なるものを持っているということです。それらを合わせて縄文の全体を説明できるのだ、という考え方です。

北黄金貝塚でどんな動物が獲れているのかということをちょっと紹介しましょう。エゾシカやオットセイ、熊、イルカなども縄文人は食べています。魚の骨の特徴を調べていくと、「これはフグだな」とか、「これはカジキマグロだな」といったことが分かります。大きなマグロの椎骨も出土しますのでは、美味しいマグロを縄文人も食べていたということになります（スライド③）。

北海道の貝塚の特徴として、縄文人が多種多様な動物を利用しているということが分かります。これは寒流と暖流がぶつかる所でもあり、太平洋側と日本海側の地理的な環境の違いもあるわけです。特に、縄文時代の環境を復元するときに、この動物層の多様な状態というのは、非常に役に立ちます。それは高緯度ほど環境の変化に敏感だからです。ちょっと寒い、ちょっと暖かいでも獲れる魚が変化をする。去年も今年も海水温が高いとサンマが寄ってこないというようなことがありますよね。サケも獲れなくて、今年はイクラがなかなか高いという話も聞いています。そういうふうに敏感なのです。これが縄文時代の環境復元をするときに、貝塚を使った研究で明らかにできるということも、他の地域よりも有利だということが言えます。

それから、貝塚は生業だけの問題ではないのです。心の問題、精神文化の問題とも密接に関わってきます。これは北黄金貝塚の貝塚を掘りこんだ墓の写真です（スライド④）。これは、北大の河野広道という先生が、「貝塚はゴミ捨て場ではないのだ、全ての生き物の墓なのだ」という論文を書かれました。これはアイヌの人たちの物送りという考え方を当てはめたものですが、北黄金貝塚では、貝塚を掘ると 13 体の人骨が見つかったということもあり、丁寧に埋葬されていることから、河野先生の説を当てはめてもいいだろうと考え、来園者、

遺跡に来た方たちには、「貝塚というのは全ての生き物の墓なのだよ」という説明をしています。これが全ての遺跡に当てはまるかというと、実はそうではないのです。地域と時代によって、貝塚と墓が重なる場合と離れる場合とがあります。ですが今から 6000 年前の北黄金貝塚では、そういうことが当てはめられるということになります。

私が発掘調査をした時に驚いたものがあります。これは伊達市のポンマ遺跡という縄文時代の後期の遺跡ですけども、ここを丁寧に発掘していくと、ホタテガイの殻が 6 枚重なっていた例がありました（スライド⑤）。これは入れ子状に重なっています。一番真ん中が挟み込まれるような、普通のホタテガイの貝が合わさる状態です。それに更に上下から、更に上下からというふうに重なっている。三个体が重なっているという状態。普通は、こうは出てきません。なぜなら、仮に置かれたとしても一晩経つと崩れる。誰かがその上を歩いたら、また崩れるということもあると思います。これは稀な例で、これが置かれた後にすぐに土がかぶせられた。そのために充填環境といって、貝が動かずにいた例なのです。こういう稀な例があるということを見過ごしてはいけません。これは縄文人が貝を投げ捨てたのではなくて、そこに丁寧に置いたという証拠になるわけです。貝塚に墓が作られるというのと同じように、食べ終わった貝を丁寧に置くということは、縄文人が貝塚に対して特別な思いを持っていた、神聖な場所だと考えていた、そういう証だということが言えます。

ということで、私は縄文遺跡群の一つの価値として、特に現代的な価値は何かというふうに聞かれたときに、こういうふうに答えるようにしています。「縄文遺跡というのは、アニミズム的な世界観が存在した証拠なのだよ」ということです（スライド⑥）。アニミズム的世界観というのは全てのものに命があるという考えです。石にも山にも命があるのだ。そういう思考形態を現代の社会は当然忘れてしまし、西洋人は特にそういう考えは希薄なわけですよね。これが、実は日本の先史文化を調べることによって、その存在を主張できるというのは、様々な価値観を認め合う必要のある現代社会において意義があるだろうと思っ

## 2-3 世界遺産登録後の流れ～多様な縄文文化の明示

青野：縄文文化の価値というのは当然あるわけなのですが、それは北海道・北東北に限ったことなのかと言われると、実はそうではありません。日本列島にはさまざまな縄文文化があります。特に、縄文を代表するような見事な土器や土偶が出土した場所というのがあります。例えば、新潟県には火焰型土器という有名な土器文化圏がありますし、長野県域は縄文のビーナスをはじめとした優美な土偶がたくさん出ます。さらには、巨大な石棒を使った祭祀が行われたということも分かっています。このように、実は日本列島にはそれぞれ地域的な特徴というのがあります。貝塚も北海道が有名ですが、仙台湾も東京湾、三河湾、それから岡山・広島の辺りも貝塚は有名です。というふうに、実は日本列島各地にそれぞれ特徴のある遺跡はあります。では、そういうものの価値はどうかと聞かれることがあります。それ

アニミズム的世界観 伊達市北黄金貝塚－縄文前期



縄文人にとっての貝塚＝すべての生き物の墓地

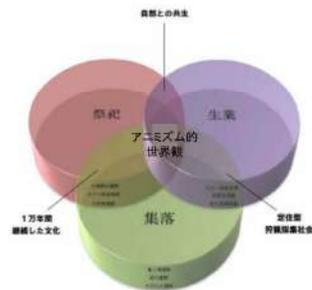
スライド④

アニミズム的世界観 伊達市ボンマ遺跡－縄文後期



スライド⑤

縄文遺跡はアニミズム的世界観が存在した証拠



・縄文文化は日本の基層文化であることは間違いない

・しかし、「すべてのものに命がある」との考え(アニミズム)を現代人は忘れつつある

・縄文遺跡群は、現代日本や欧米の社会とは異なった価値観である狩猟採集民の文化が存在した証し

・「自然の中の一員」と捉える思考を1万年間続けたことがユニークであり、後の文化にも影響している

縄文遺跡群(貝塚・ストーンサークル・水場・土器・土偶など)を調査・研究すると、現代社会が忘れたもう一つの思考方法の実感に迫ることができる。⇒大きな価値

スライド⑥

は当然、価値はあるわけで、先ほど「北海道・北東北の縄文遺跡群の価値は」というふうにしてユネスコに説明していた大部分は、実は日本列島の縄文の説明でもあったわけです。では「なぜ北海道・北東北だけなの？」ということになるわけです。実は遺跡の残りの良さ、保存という部分はかなり大きいのです。北海道・北東北は非常に面積が広いです。そして、開発は、本州の関東以西に比べれば比較的少ないわけですね。ですので、良質な縄文遺跡が、保存状態が良好なまま残されていた。これが非常に大きいわけです。ということで、北海道・北東北は、実は日本列島を代表して先に世界遺産になったのであって、他の価値もやはり一緒に発信していくということが必要になってくると思うのです。今後は世界遺産になりましたので、それぞれの遺跡が他の地域のことをしっかり紹介しあうということが大事になってくるはずなのです。日本列島には、オリジナリティのあるユニークな文化圏がたくさんあって、それらを巡ることでより多くのことが学べるのだということ、それぞれの遺跡の担当者が主張していくとか、説明していくということが必要になってくると思います。

余談ですが、今の話はNHKの「視点・論点」という番組でもしました。これは10分間の番組なのですが、これ一発撮りなのです。私は全然緊張しているつもりはなかったのですが、顔がこわばっているのを、皆さんには「緊張してたね」と何度も言われました。私、今日もそんなに緊張しないのですが、顔のデザインが生まれつきこうなものですから怖いように見られるのです。ある人は、録画して3回見ました、と。1回目はもう顔から緊張感が伝わってきて全然話が耳に入ってこないということで、2回目からはようやく落ち着いて見ることができて、3回目ですらようやく理解したと言われました。ありがたいような、申し訳ないような感じでおりました。この番組でも先ほどのような話をして、定住の意味ということも、もう少し詳しく話をしました。

「各地にはさまざまな縄文文化があるのだよ」と言ったときに、実は私、ここにバッジをつけていますね、今日もつけているのですけども、これ気づいた方はマニアックな方でしょう。福島市の上岡遺跡出土の「しゃがむ」土偶のバッジでした（スライド⑦）。このピンバッジをなぜつけているかという今、私は山形に住んでいて、福島の仕事もしているのです。土偶といえば、カックウ（茅空：中空土偶）などが有名ですけども、他にもたくさんあるのだよということも知ってもらいたかったわけです。

そして、山形にいますので山形の土偶も紹介しないと怒られますので、ちょっと皆さんには我慢して聞いていただきたいのですが、「縄文の女神」という国宝の土偶は有名ですよ。山形県舟形町の西ノ前遺跡で出土したものです。譽田亜紀子さんという有名な土偶女子の著書でも紹介されています。この方は、考古学者よりも多く土偶を見ているのだと思います。ご著書の『土偶界へようこそ 縄文の美の宇宙』（譽田亜紀子:2017 山川出版社）はとても素晴らしく、あらゆる角度から撮影した土偶が載っていて、「角度を変えると分かることがあるのだよ」と教えてくれています。ぜひ、この本を手にとっていただければと思います。

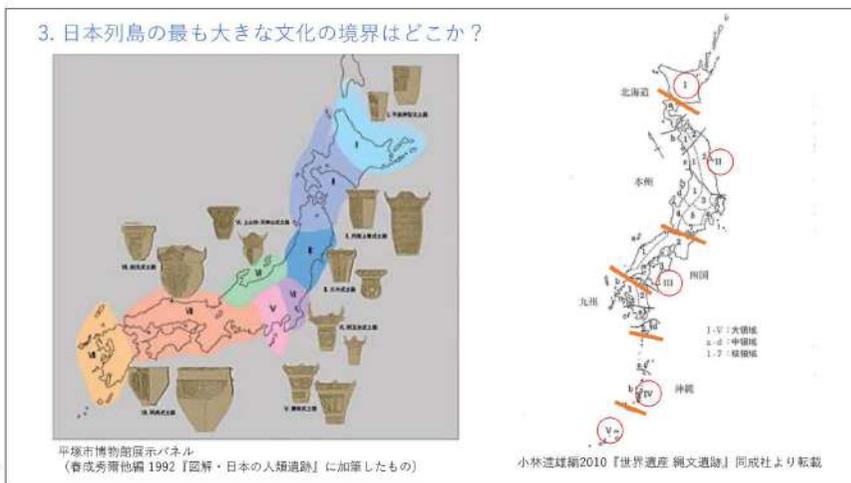


スライド⑦

(縄文後期)



スライド⑧

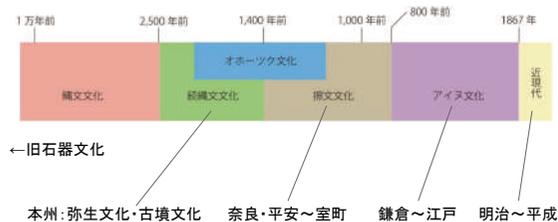


スライド⑨

さて、西ノ前型土偶には実は面白いところが1点あります。それは、足の裏がくぼんでいるのです(スライド⑧)。皆さん、ご存知でしたか。これは西ノ前遺跡発掘調査報告書(財団法人山形県埋蔵文化財センター 1994)に載っている実測図で、土偶の足を下から見たものと断面図です。下がくぼんで空洞になっています。これなかなかご存知無い方が多いと思います。なぜなら、接合されて復元した土偶が立った状態で展示されることが多いからです。レプリカもそうですよね。ですので、足の裏まではさすがに見ることができない。実は、お土産物を見ると面白いのです。この右側は古い物で、多分10年ぐらい前の文鎮のような重たい物なのですけども、これは窪みがありません。しかし、最近の「ガチャガチャ」はよく出来ていて、腰をくの字に曲げて座れるようなデザインにして、足の裏の窪みを見せているわけです。この窪みって何なのだろうかとというのは、実はまだ分かっていません。ひとつの説として、「粘土が全部詰まっていると生焼けになるので火の通りが良くなるように窪ませたのだ」という説で解説されることもあります。ただ、そんな必要のないような小さい土偶にも実はくぼみがあったりします。ですので、例えば、立てるために必要だったのだとか、人と同じように土踏まずの表現なのだとか、いろいろな仮説はあるわけです。実はこの窪みの謎に、私のゼミ生が、今チャレンジしてまして、卒論をこの西ノ前型土偶の窪みで書いているところです。何を言いたいかと言うと、このお土産物、グッズ開発についてです。遺跡の活用、遺物の活用、その中の一つとして考えるとしたときに、「足の裏に窪みがあるのだよ」というこのトリビア。これちょっと面白いと思いませんか? つまり、まだ解決していない謎なのですが、最先端の研究でもあるわけです。そういうものと、このグッズをお土産で渡したときにセットでお話ができると思うのです。つまり、普通の人は気づかない足の裏に穴が開いていて、それが実は研究すると面白いことが分かるのだよ、という情報とセットであるというのがミソだと思うのです。遺跡の活用を考えるうえで、考古学的な部分の情報と一緒に売り出すということが、面白みにつながると思います。

ちなみにですが、古い土産物である文鎮型の土偶の足には穴が開いていません。ということは、この文鎮を作った人は、形をまねたときに足の裏までは見てなかったということになりますね。ガチャガチャで出てくる土偶は、本物の土偶の裏を見たことがあるということになります。場合によっては、3Dスキャナーで撮ったものを参考に作ったのかもかもしれません。これは実は、縄文時代にも当てはまる大事な視点なのです。例えば、この西ノ前遺跡というのは、大きな「縄文の女神」が有名ですが、実は小さい土偶が数十点出土しています。その小さな土偶の足の裏が窪んでいるものといないものがあるのです。つまり、大きい土偶であれば生焼けを防ぐためという理由も頷けますが、小さいものであればそんな必要はない。じゃあなぜ窪ませたのかというと、大きな土偶の足の裏が窪んでいるわけですから、小さな土偶もそう作るべきなのだ、足の裏が窪んでいないものは本式とは言えないのだ、と思っている人が真似て作ったということです。つまり、小さな土偶を作った人たちは、この大きな西ノ前型土偶の足の裏を見たことがあるということです。儀式

## 北海道の文化の区分



スライド⑩



常呂川河口遺跡の幣舞式土器 (縄文晩期) 所蔵：北見市教育委員会  
出典：文化遺産オンライン <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/276326/1>

スライド⑪



常呂川河口遺跡の幣舞式土器 (縄文晩期)  
所蔵：北見市教育委員会  
出典：文化遺産オンライン  
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/276326/1>

スライド⑫

の時に運んだことがある村人かもしれない。そういう人が作ったのだと考えると、この足の裏の窪みを持っている土偶が隣の村にもあったのか、遠く離れた村ではどうなのかといったことが当時の儀礼の仕方や参集範囲を復元するうえで非常に大事になります。実際には、少し離れた宮城県にも窪みを持つ土偶があります。土偶の祭祀に参加した隣人が自分の村に情報を伝えたのか、足の裏のことを知っている女性が他所に嫁いだのかもしれませんが。グッズ開発にも、こういう面白い、面白いと思うかは人にもよりますが、最新の情報を盛り込んでいくといいのかなと思っています。

## 2-4 日本列島の最も大きな文化の境界はどこか？

青野：さて、次に日本列島の中で大きな文化の境界はどこにあるのかという話です（スライド⑨）。実は、北海道は大きな文化圏、つまり2つの文化圏にまたがっているのだということです。一つは、北海道・北東北の縄文遺跡群がある道南西部。そして、それとは全く違う文化というのが道東にあります。今日は小野さんに標津の話をしてもらいます。それは北海道・北東北の縄文遺跡群にはないものです。非常にユニークな、そして魅力的な縄文文化がそこにある。縄文文化だけではない。その後のオホーツク文化も含めた特異な地域であるわけです。特異なというか、そこでは当たり前なのでしょうけれども、道南西部と比べると違いがある所です。この違いというのが、実は遺跡群を活用していく取り組みのときに大きな武器になるわけです。つまり、札幌にやってきた人たちは、南に行つて遺跡を見て、東に行つてまた別な遺跡を見て、それぞれの遺跡を対比できる。文化圏を行ったり来たりして見ることができるわけです。こういう売り出し方、北海道の地理的な特徴と文化の特徴、歴史ですよね、それを理解したうえでぜひ回ってください、というようなことができるのではないかと思います。

日本列島には土器の文化圏がいくつも存在しました。円筒土器といわれる土管状の土器を作る地域もあれば、非常に装飾豊かな関東の土器、中部高地の土器などというようにいくつかあるわけです。こういう文化圏、つまり縄文時代を通してどこに差があるのかということ、小林達雄先生が図にしています。これの中で、ローマ数字のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴと5つに分けた部分の一番北の部分が石狩低地帯になります。おそらく日本列島全体で一番差の大きな場所が道東と道南西部の間になると思います。それぞれはさらに小さな地域に区分されます。例えば、青森県圏域であれば津軽と南部は有名です。太平洋側と日本海側で文化が違うというのは、当然地理的な要因があるわけです。津軽海峡は、一応、差はありつつも行き来はできる関係ですので、北海道・北東北の縄文遺跡群が一つにまとまるというのは、そういう意味がある。その北や東にある道東の遺跡というのは、道南西部と津軽海峡を挟んだ文化の違い以上のものがあるのだよ、ということなのです。それを知っていただければと思います。

ちなみに、北海道の文化区分の中にオホーツク文化という北方からやってきた文化があ

りますが、この時期の東と西の違いは際立ったものです。北海道内における東西の文化的な差異はそれ以前の縄文時代にまで遡ることができます（スライド⑩）。

具体的に見ていくと、土器の形が全然違います。これは北見市常呂川河口遺跡の縄文時代晩期の土器です（スライド⑪⑫）。特徴的なのは底が平らじゃない、不安定な形の舟底形になっている点です。どうもこういうのを見ると、木をくりぬいたようなものにも、それから白樺などの樹皮を剥いで、それを折りたたんだ形の容器にも見えます。つまり、有機質の物を土器で作ってみるとこういう形になるのではないかというようなイメージ、こういうのは、道南西部では見られません。道東のオリジナルの器形です。しかも本州でも見られないということです。中には、獣の皮で作られた容器、例えば、水を溜める水筒のような物が原型としてあって、それを粘土で作ってみるとこういう形になったのではないかと思われるような特異な形の土器もあります。

道南西部はどのような土器かという、青森県の亀ヶ岡式の土器、青森・岩手辺りの土器と同じような形の土器を使います。というふうに、形を見ても発想そのものが違うのではないかなという印象を持ちます。こういうものも石狩低地帯を挟んで東と西でちょっと行くだけで、違いに気づくことができる。あるいは気づいてもらうような戦略を立てる、ということが必要になってくると思います。

## 2-5 世界遺産だけに縛られない柔軟な活用戦略

青野：では、この後は少し頭を柔らかくしてというところなのですが、活用というのを考えていきます。今まで話をしました縄文文化、それから世界遺産の基礎的な部分を念頭におきながら、でも柔軟に、どうやったら魅力的に一般の人たちに縄文の魅力を伝えられるか、楽しんでもらえるか、というようなことをみんなで考える必要があると思っています。そのときに、どうしても今日私は少し固めな話をしてしまいました。考古学を研究する人間というのは、どうしてもそういう癖のようなものがあります。でも、一般の人たちに分かりやすくというときに、やはり柔軟性というのが大事ですよ。ですから、いろいろな人たちに関わってもらいながらアイデアを出してもらうのが良いと思っています。民間の方たち、特に事業者の方たちは、本当に頭も柔らかくさまざまな取り組みをすでにされています。シー・ビー・ツアーズの戎谷侑男社長は、もう20年ぐらい前でしょうか、「北黄金貝塚でツアーを作りたいんだ」というふうに言ってくださって、まだ全然お客さんもない時から、札幌発の北黄金貝塚に来るツアーを作ってくれました。ようやく世界遺産になった。これは、そういう民間の方たちの応援があつてこそであると思っています。戎谷さんたちの発想の中で私がすごいなと思ったのは、やはり遺跡を取り上げるだけだと、それを目的に行く人にはいいかもしれませんが、それ以上のものにならないという点です。つまり、遺跡だけを巡るツアーではなく、その周辺の食ですとか、他の観光の部分もやはり組み合わせていくほうが、多くの人に関心を持ってくれるということです。ですので、もちろん食の中には、縄文

人が魚介類をたくさん食べた話なども盛り込むことができますし、噴火湾の今食べても美味しいいろいろな物を実際に食べて喜んで帰ってもらおうということもできるわけです。私たちは、どうしても世界遺産の所だけを巡っているとツアーになるのだと思いがちです。確かに北海道は広いので一気に回りたいと思うと、「世界遺産だけ」というツアーになりがちです。でも考えてみると、日本遺産とか北海道遺産というものもありますし、他にいろいろな指定のものもあります（スライド⑬）。さらには、縄文文化だけではなくて、アイヌ文化の博物館もあればコタンもあるわけです。そして、開拓移住の歴史、和人の文化を表すものもあって、北海道の歴史と文化というものを総合した見せ方ができますよね。それにもっと魅力的なというよそに失礼ですが、食であったり、ジオパークであったり、温泉であったり、いろいろなものが北海道にはあります。ですので、縄文がテーマであれば、世界遺産がテーマであれば、その情報を盛り込んだメニューというものを考えれば、あとは自由で良いのではないかというふうに思っています。

例えば、私が伊達市にいた時に取り組んだものとして、蝦夷三官寺の北海道遺産登録という事業がありました（スライド⑭）。蝦夷三官寺とは伊達市の有珠善光寺、様似町の等澗院、厚岸町の国泰寺という江戸幕府が作ったお寺のことです。この時にも、戎谷社長には「じゃあツアーを作ろうよ」という話をされまして、これを一気に回るとするのは結構大変なのです。遠いのです。その中で、「他の北海道遺産も合わせて巡るツアーにしたほうがいいよね」ということになりました。ですので、今も蝦夷三官寺を巡るツアーというのをやっていたように思っていますが、おそらく他の遺産も見られているのでしょう。

この蝦夷三官寺というのは幕府が作ったので、和人の歴史なのですね。ただ、アイヌの人たちとの関りも非常に強いのです。やはり私たちは、歴史を見る上で客観性というのが非常に大事になります。和人側だけの考え、アイヌの側だけの考えというのではなく、双方の考えをしっかりと理解するということが歴史や文化を、さらには民族を正しく理解することにつながると思います。ですので、和人の遺産を見るのだとしたら、アイヌの人たちのものも一緒に見る。ウポポイに行くということの重要性というのはあると思うのです。ですので、その辺のバランスをしっかりと取ったツアーというのが望まれると思います。

そして、何より遊び心も大事だなと思っています。私たち北海道遺産を目指した時に、3市町の担当者や市長さん、町長さんたちとも何度も打ち合わせを重ねたのです。その時に、まだコロナなんかなかった時ですから、会議をした後に食事に行きます。そうするとお国自慢が始まりますよね。伊達はホタテが有名だ、様似はツブがうまい、厚岸は言わずと知れた牡蠣です。酒も飲んで、担当者もいい感じになってきますと、いろいろアイディアが出てくるわけです。じゃあこの3つを組み合わせた寿司を作って売り出してはどうだろうか。名前は“蝦夷三官寿司”でどうでしょうか、というような話も生まれてくるわけです。遊び心というのは非常に大事で、食の魅力と親父ギャグで売り出していこうというふうに思っています（スライド⑮）。

#### 4.「世界遺産だけに縛られない柔軟な活用戦略 —北海道の歴史・文化への理解を基礎に—

- ・ 世界遺産
- ・ 日本遺産
- ・ 北海道遺産
- ・ 国指定史跡
- ・ 北海道指定史跡
- ・ 市町村指定史跡
- ・ 縄文文化
- ・ アイヌ文化
- ・ 和入文化



スライド⑬

#### 蝦夷三官寺 ～未来に伝えるアイヌと和人の関係史～

北海道遺産に認定!

江戸幕府が1804年に建立した寺院

- ・ 有珠善光寺 (げんこうじ)
- ・ 様似等澗院 (ようじめいん)
- ・ 厚岸国泰寺 (こうたいじ)



**役割:** 蝦夷地で死亡した和人の葬儀とアイヌ民族への仏教布教

**背景:** 対ロシア政策として幕府による蝦夷地支配を示す狙い

**特徴:** 緩やかな文化接触  
⇒ アイヌ文化の独自性  
⇒ 寺への崇敬の念の保持

スライド⑭

#### 蝦夷三官寺みらいネットワーク

- 構成団体
- 有珠善光寺・様似等澗院・厚岸国泰寺
  - 伊達市・様似町・厚岸町
  - 有珠善光寺文化振興会
  - 有珠観光ボランティアの会
  - 伊達アイヌ協会
  - 厚岸ふるさと友の会

「明治期以降とは異なるアイヌと和人の関係」



伊達市

- ・ 文化資源を通じた住民の交流
- ・ 巡回展と文化観光
- ・ 蝦夷三官寺フェア

様似町

厚岸町

「蝦夷三官寺みらいネットワーク」



スライド⑮



スライド⑯

全国各地にそういう遊び心溢れるメニューがあります。例えば、島根県の博物館では「古墳ゼリー」というのがあって、ゼリーを食べていくと、中からクマのグミでできた被葬者が出てきます。「四隅突出カレー」は弥生時代の墳丘墓の形のカレーライスです。剣先スコップ形のスプーンで食べさせるというところも乙ですよ。

それから、食べ物に絡めて、しっかり学んで楽しむことも重要だと思っています。例えば、お菓子づくり考古学者のヤミラさんがやってくださったワークショップです（スライド⑯）。2017年3月に「土器! Doki!? 縄文ワークショップ“ドッキー”をつくろう」とのイベントを伊達市で開催した時のことですが、このヤミラ（本名・下島綾美）さんはこだわりがすごいのです。実際の土器を、ちゃんと子供たちに観察させます。色はどんな色かな、模様はどんな模様かな、縄文を転がしているのかな。それから、断面は真っ黒なのか、それともクリーム色と黒のサンドイッチ状なのか、なんていうふうにちゃんと観察させて、ワークシートに書かせます。それを基にして、クッキーの生地の色を付けます。例えば、食用の竹の炭を練り込んで色をつけたものを、サンドイッチ状の断面だったら3枚重ねて焼きましょう。文様は沈線文なのか縄文なのか、ちゃんと本物と同じように作るということ。こういうふうにして実際に焼いて、食べられるドッキー（Dokkie）を作ります。ドッキーと本物の土器を並べてみると区別がつかない。つまり、観察する、ものを見る、というのは考古学の基本なのですが、そういうことを楽しく知ってもらうためのワークショップということになります。

ということで今日、私が話をしたのは、縄文の世界遺産の価値もそうですし、これからの活用のことを考えていくのですが、大事なことは世界遺産だけに縛られない柔軟さです。他のものとの組み合わせというのが、おそらく魅力を倍増してくれるのだろうなという予測が立ちます。

ただし、本質から離れすぎないことも大切です。活用と言うと、どうしてもそのことだけ

が空回りしてしまって、遺跡や遺産と関係のないものに発展してしまう可能性があります。例えば、遺跡の中を全く違う施設にしてしまうと、そこが遺跡だということは忘れ去られてしまうわけですね。「綺麗な花を植えると人が来るから遺跡に花を植えたほうがいい」という考え方があるかもしれませんが、遺跡であることが忘れられ、丘全体に広がる「お花畑」としてだけ認識されてしまったら意味がないわけです。つまり、本質は外さない。北海道の歴史・文化というものを理解してもらって、知ってもらって、その魅力に気づいてもらって、喜んで帰っていただく。そのための入り口、敷居を低くして楽しくする。それをどうすればいいのかなということが課題になってくるわけです。ですので、あくまでも北海道の歴史・文化への理解というものを基礎において、あとは柔軟な考え方で活用していくというのが重要なかなと思っています。

**岡田:** 青野先生ありがとうございました。北の縄文遺跡の世界的な価値というところから活用を踏まえ、今後私たちが考えていく際のポイントを踏まえてくださった基調講演でした。

### 3. 事例報告：標津遺跡群にみる根室海峡沿岸地域の縄文文化

**岡田:** 次に小野園長から、事例報告として、標津の遺跡群についてご紹介していただきたいと思いますが、それに先立ちまして、小野園長のプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。

東京都八王子市出身の小野園長は、北海道大学大学院を修了後、北海道内の市町村にて学芸員業務に従事されてきました。2009年より標津町のポー川史跡自然公園に勤務され、学芸員として考古学研究及び史跡保存に携わってこられました。それでは小野園長、お願いいたします。

#### 3-1 北海道東部の遺跡について

**小野:** 皆さんこんにちは。ポー川史跡自然公園の小野と申します。どうぞよろしくお願いたします。今の青野さんのお話を伺っていた中で、いくつか印象に残ったのがあったのですが、全国に縄文遺跡がある中で、何で北海道南西部と北東北の遺跡が世界遺産になったのかと言った時に、青野さん、保存状態が良好だというところに触れていましたよね。多分、保存状態が良好だということだけを取り上げると、北海道東部北部の遺跡のほうが、かなり保存状態は良い遺跡があるのです。それでもやっぱり北海道南西部と北東北の遺跡が世界遺産としての価値を持って世界遺産登録されたのかというその決定的な違いは、おそらく保存状態がいいのだけれども、世界遺産登録された地域については、例えば、開発に伴う緊急調査とか、あるいは大学が入りやすいフィールドということで学術調査も適度な発掘

調査があつて、良好な保存状態の遺跡の価値をさらに高めるような学術的なバック情報が結構あるのだらうかと、そういうところが決定的な差かなと思っていました。

そこで、北海道東部の遺跡がどんな場所なのかというと、十分な発掘調査も行われていない地域なので、文化的なところはなかなか説明しづらいところがあるのですが、実際にどんな場所なのかということ、この後、私のフィールドとしている標津遺跡群の話題を取り上げて紹介していきたいと思います。

タイトルは「標津遺跡群に見る根室海峡沿岸地域の縄文文化」ですが、正直、縄文文化というところの話はほとんど触れていなくて、この標津遺跡群の特徴に従って、かなり幅広い時代でのお話というかたちになります。

まず、標津遺跡群の位置は、北海道東部の根室海峡沿岸に面した標津町にあります（図-1）。標津の市街地から北に4キロの場所に、ポー川と伊茶仁川という川が流れています。その河川の流域に標津遺跡群が広がっています。その中でも今、画面の図の緑色で塗られた所、そこに標津遺跡群の中核的な遺跡である伊茶仁カリカリウス遺跡という遺跡が残されています。ここの遺跡の特徴は、現在の地表面から古代の竪穴住居跡をくぼみとして観察できるということです。ちょうど今、左下の写真にあるように、これは春先に撮影した写真ですが、くぼみに雪が溜まっている状態、このような形で遺跡が残されています。

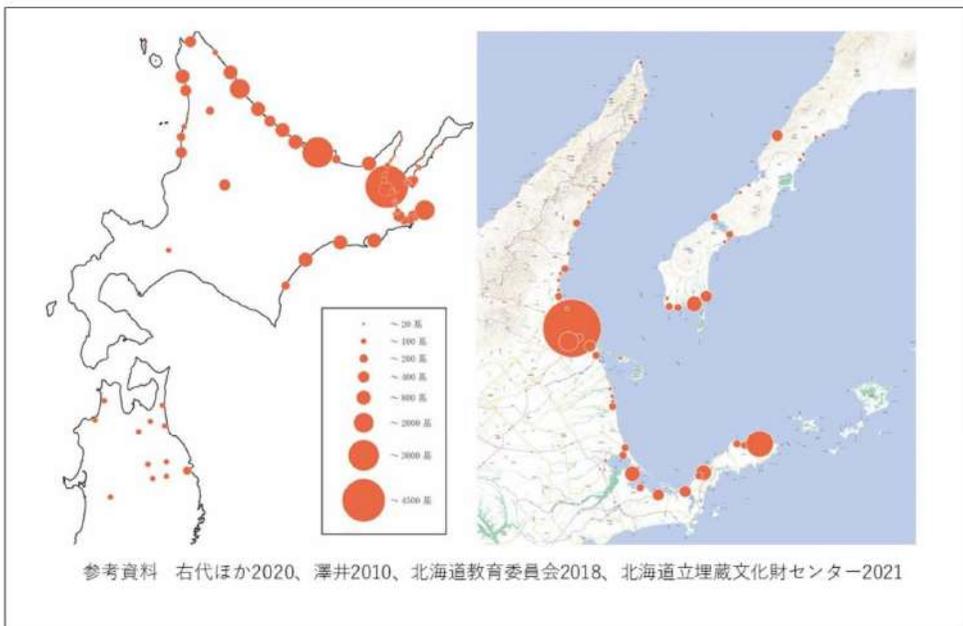
この標津遺跡群の価値をいろいろまとめて整理し直しているところで、そこで今、整理された要点を紹介していきたいと思います。

まず、世界史的な視点に立った時の標津遺跡群の価値は何にあるかというと、縄文時代だけでなく、その後の続縄文時代、擦文時代、アイヌ文化期まで、およそ1万年間ずっと人の暮らしが続いてきた遺跡であるということ。さらに、そういった遺跡が埋まりきらずにくぼみで残る竪穴住居跡として残されている点。これが非常に大きな、まず世界的な視点に立ったときの価値かと思っています。次に、日本史的な視点で捉えると、縄文時代から一貫してサケの利用に重点を置いた暮らしが営まれた、そういった遺跡群であるということになります。そして、最後は北海道史的な視点ですが、これは縄文から離れてしまうのですが、オホーツク文化と擦文文化という、大体1000年前ぐらいに栄えた文化の2つが接触融合したトビニタイ文化の形成過程を伝える非常に貴重な場である、こういった4つに絞られるのかなと考えています。特に、この中で縄文時代からアイヌ文化期まで人の暮らしが続いてきたということが大きな一番の特徴かなと思っています。

その価値の部分について、もう少し詳しく見ていきたいと思っています。まず、縄文時代からアイヌ文化期まで1万年継続して人の暮らしが続いて、しかも竪穴がくぼみで残り続けると一体どういったことが起こるかということ、非常に大規模な竪穴住居跡群が形成されることになります。どれくらい大規模かというと、今、画面に出た図は、北海道北東北で確認されているくぼみで残る竪穴群、それを地域ごとに調べたものです（図-2）。見つかっているくぼみの数に応じて円の大きさを変えて表現しています。円が大きいほど竪穴の数が大き



図-1 史跡標津遺跡群の位置



参考資料 右代ほか2020、澤井2010、北海道教育委員会2018、北海道立埋蔵文化財センター2021

図-2 長期にわたり形成された大規模竪穴群

いということを表しています。この図を見てもらうと分かる通り、北海道東部から北部にかけてが、非常に大規模な竪穴が残されている地域だということが分かります。そのなかでも、根室海峡沿岸にかなり大きな円が密集しているのが分かるかと思います。そこで、この根室海峡沿岸をさらに拡大した図がこちらです。これを見ていくと、竪穴群が根室海峡沿岸のいろいろな所にあるのですが、なかでも標津町にある標津遺跡群の所が、とりわけ大きな円で描かれています。実は、この標津遺跡群全体で竪穴のくぼみが4千を超える数残されています。これは国内で最大の数と言っていいと思います。これが縄文時代からアイヌ文化期まで、その累積によって非常に大規模な竪穴群が形成された、そんな場所になっています。

### 3-2 自然環境とセットで残る1万年の居住跡「大規模竪穴群」

小野：次に、遺跡での暮らしの特徴についてですが、標津遺跡群では縄文時代から一貫してサケの利用に重点を置いた暮らしが続いていたということが分かっています。遺跡を調査しますと、当時食べたものの残りが焼けた骨として見つかるのですが、その内容を調べると、縄文時代では、見つかった動物の骨の全体の内の9割近くがサケの骨でして、かなりサケを重視した暮らしだったということが分かっています。これは標津遺跡群の際立った特徴と考えています。

このような特徴を持つ標津遺跡群ですが、実は世界遺産登録された北海道・北東北の縄文遺跡群と同じ時期に世界遺産登録を目指して手を挙げたという経緯があります。平成19年に、先ほど青野さんの報告の中でも紹介されていた北見市の常呂遺跡群、そこと一緒に「北海道東部の窪みで残る大規模竪穴住居跡群」という資産名称で提案書を国に提出しています。しかし、残念ながら暫定一覧表記載候補という位置付けにとどまっております。現在はそれぞれの資産の価値を高めるために活動を継続しています。

この標津遺跡群、北海道東部のこういった竪穴群の魅力は一体何にあるのかということに触れていきたいと思います。この魅力については、標津遺跡群に隣接して天然記念物の標津湿原という湿原があり、その湿原をはじめとして、遺跡周辺には世界自然遺産の知床、あるいはラムサール条約登録湿地の野付半島など、優れた自然環境が残されています。おそらく、こうした自然環境とともに遺跡が残されていること、これが最も大きな魅力ではないかなと感じています。1万年にわたって人と自然が調和してきた暮らしを続けてきた結果が、自然環境とセットで残る大規模竪穴群という姿で今に現れているのだと考えているところです。

そこで、ここからは自然環境とともにある遺跡が一体どんな姿をしているのかということ、映像を通じてお伝えしたいと思います。

最初の映像は、カリカリウス遺跡のドローン映像です（写真-1）。画面手前に川が見えていますが、これがポー川です。奥に見える山並みは知床連山です。だんだん遺跡のほうに近づいていきます。ちょっと白い点々が見えますが、ここに復元した竪穴の施設がありま



写真-1



写真-2



写真-3

す。これが復元した堅穴の施設です(写真-2)。昭和56年に発掘調査をした堅穴を対象に、床面の構造を復元公開できるように整備した場所です。ここの堅穴については、縄文時代のものではなく1000年前の擦文時代のもので整備されています。この復元された場所を過ぎていくと、画面の奥に落ち葉で覆われたくぼみが見えてきます。これが古代から残されたままの状態を観察できる堅穴のくぼみとなっています。

こちらにも遊歩道沿いに見える堅穴のくぼみです(写真-3)。この場所はカリカリウス遺跡という遺跡なのですが、その遺跡の中でも最も堅穴が密集している場所です。この遊歩道周辺の区画だけで300ヶ所以上の堅穴のくぼみが集中して残されています。これも大体1000年前の擦文時代のものでした。

こちらは同じ場所を春先にドローンで空撮した映像です(写真-4)。雪が溜まっている場所が堅穴のくぼみとなっています。かなりの数の堅穴が密集していることがよく分かると思います。

こちらは夏場のドローン映像です(写真-5)。遺跡全体は、ミズナラ主体の広葉樹に覆われています。どんぐりなどが秋に実をつけるのですが、手前に見える川もあって、森が広がっていて、見渡す限りの森の中がカリカリウス遺跡ということに指定されている範囲になっています。森の中には、このような樹齢500年を超えるような巨木も多く残されています。

こちらコゴミなのですが、遺跡周辺には多くの山菜類も自生しています。

こちらの映像は、遺跡に隣接する天然記念物標津湿原です(写真-6)。国の史跡と天然記念物が隣り合わせで一体的に保存されていて、両方合わせると東京ディズニーランドと言うと12個入るぐらいの範囲が保護区域として、現在保存されている状態です。

こちらは湿原に自生しているエゾイソツツジという花です(写真-7)。アイヌの人たちは、この葉っぱを煎じてお茶のようにして飲んでいたと言われています。

こちらはエゾゴゼンタチバナという花で、絶滅危惧種に指定されている花です(写真-8)。夏に赤い実をつけるのですが、それを食べることができます。

こちらはワタスゲですね(写真-9)。アイヌの人々はこの綿の部分を取っておいて、冬場の防寒対策に靴に詰めていたそうです。

湿原には草原性の野鳥も多く見ることができます。遺跡周辺では、これまで115種の野鳥が観察されています。

鹿は珍しくもなにもないと思うのですが、遺跡内には鹿の他に普通にクマも生息しています。今年、札幌でも結構クマ騒動がありましたが、うちでも7月にクマが頻繁に出没しまして、コロナではなくクマが出たことによって遺跡の公開を停止した時期が何回かありました。

こちらはポー川の流れです(写真-10)。茶色く濁っているのですが、決して汚れているわけではなく、湿原の成分が滲み出て褐色に見えています。水質的には非常に良好な川でして、清流に育つといわれるバイカモが見られるほか、北海道東部で生息している淡水魚



写真-4



写真-5



写真-6



写真-7



写真-8



写真-9



写真-10



写真-11



写真-12

のほとんどが生息しています。このポー川の水というのは、遺跡周辺で湧き出ている湧き水を集めて流れています。湧き水は真冬でも凍ることがありませんので、堅穴を残した人々たちは、冬でもここに来れば水を手に入れることができたのですね。こちらは湧き水の泉です(写真-11)。泉の底からどンドン水が湧き出ているのですね。こうした湧き水の周辺というのは、サケの仲間の産卵場としても非常に貴重な場所です。春先になると多くのサケ科魚類の稚魚が姿を見せています。昔はここに遡ってきて、鮭が産卵をしていた、そんな場所になります。今の画面はヤマメの稚魚だと思います。こんな光景が春先に来ると、よく見ることができます。

再びポー川の映像に戻るのですが、カヌーが今移動しているのですが、川は飲み水とかサケを獲るだけではなく、かつては交通路としても重要な役割を果たしていました(写真-12)。非常に流れが緩やかな川なので、当時であれば丸木舟を使えば、河口から遺跡まで舟でさかのぼって移動することもできたと思います。この映像は、丸木舟に乗って移動していた人々と同じ目線で見た川の様子です。遺跡群には、カヌーに乗ってポー川を移動する体験なども行なっています。

このように、標津遺跡群の堅穴周辺というのは、当時の暮らしの理解につながるような自然環境が良く残されています。私はこうした遺跡と自然環境が一体的に残されている点というのが、この遺跡群の最大の魅力だろうと考えています。

以上で私からの話題提供の報告を終わりたいと思います。

#### 4. パネルディスカッション、質疑応答

**岡田:** 小野園長、ありがとうございます。基調講演でご紹介いただいた北東北、南北海道の遺跡とはまた少し違った道東の遺跡の特徴についてご紹介いただきました。

それではここからパネルディスカッションに移りたいと思います。パネラーは、今ご登壇いただきました青野先生、それから北海道の縄文文化の多様性について、これから話題提供をしていただきます標津町ポー川史跡自然公園の小野哲也園長、そして西山先生にご登壇いただき、私が司会進行を進めていきたいと思います。

早速、視聴者の方から質問が来ていますので、全部はなかなかご紹介できないかもしれませんが、できるだけご紹介してディスカッションの中でお答えいただければと思います。

##### 4-1 北海道・北東北の縄文遺産だけがなぜ世界遺産に？

**岡田:** 最初に、「北海道・北東北の縄文遺産と本州、特に東日本の縄文遺産はどこが違うのでしょうか。本州の縄文遺産には世界遺産の価値はないのでしょうか？」という質問が来て

います。この点、青野先生それから小野園長のお話の中でも少し触れられていましたが、改めてポイントを整理できればと思うのですが、この点については、ひとつ世界遺産の制度的な特徴も関係していると思いますので、まず西山先生から始めていただいて、次にもし青野先生、それから小野園長のほうで考古学的な観点から補足があればお願いします。

**西山：**ありがとうございます。お二人の先生に、大変魅力的で濃密なプレゼンテーションをいただき、非常に心が豊かになったような気がいたします。特に、前半では青野先生の定住する狩猟採集文化そのものが実は世界史的に珍しく、それがあだけの物的な証拠をもって示されるというのは非常に迫力のあることです。私も北の縄文を少し勉強はしたつもりだったのですが、やはり世界遺産の登録申請では、一番の核となる価値、まさに Outstanding Universal Value ということで、他に類を見ないとか、傑出したとか、代表するといった、かけがえのない価値が問われるわけですから、そういう意味で、ここは譲れない、これこそが日本の縄文の価値なのだという、まず根幹的な部分を教えていただいたのだなと思いました。

しかし、私も最初に問題提起的に話させていただいたように、ご質問された方もまさに同じだと思うのですが、どうして北海道・北東北の縄文遺跡が優れていて、それ以外の地域の縄文遺跡は劣っているのか、という風に、どうしても普通の人は考えてしまいます。世界遺産になれる・なれないの差と言ってもいいでしょう。ところが今、岡田先生もおっしゃったように、世界遺産というのは実はかなり難しいと言いますか、理屈っぽいところとか、戦略的なところが当然一方であって、私も10年前に北の縄文の学識者の懇談会、道庁さんが主宰される会議に出て議論していたのですが、やはり最初は、このまま東北と北海道だけでやっていけるのかなと心配していました。全く同じようなことが、「明治の産業革命遺産」の時にもありました。最終的には「明治日本の産業革命遺産」という形で登録がなりましたけれども、当初は「九州・山口の近代化産業遺産群」ということで、九州・山口だけで知事の人たちが集まり、自分たちでやろうということを書いていたわけです。それが結果としては、やはり日本の産業革命遺産は九州・山口だけではないということで、その理屈を守れずに、日本の他の地域の静岡の韮山や宮城の釜石、つまり関東地方、東北地方も入れなければならなくなった。北の縄文も、そういうようなことに結局なるのではないのかと考えていたわけです。だから北の縄文というのは、やはりどこかで地域の限定性をギブアップせざるを得ないのではないのかなと、実は私、今にして思うのと不遜ですけれど思っていたのです。でも結果としては、しっかりとした理論武装のうえで、先ほどの文化の違いの話もありましたけれども、きちんとこの地域で北の縄文という形で説明しイコモスの専門家やユネスコの世界遺産委員会を説得した、納得させたというところがあつたと思うのです。どちらかと言いますと今日は、別に世界遺産だけが大事ではないという話を後半したいということがありました。そこで青野先生も、どちらかという、その部分はあまり細かく説明せずに、どちらかという縄文の価値についてお話されたようにも感じたのですが、やはり視聴者の

方の多くが、どういう理論武装ができたから北の縄文が他の地域に広がらずに世界遺産になれたのか、ということについて、もしよろしければ追加でお話しいただけないかと思えます。

**青野：**はい、分かりました。一つは、もしこの文化圏ではなく世界遺産を目指す方法としてどういう手があったかという、例えば、北海道から一つとか、本州から3つとか、九州からいくつみたいなやり方というのはあったかもしれません。そうすると、今度は縄文文化というのはそんなに広いのかという話が出てきます。世界の中で、文化圏というのは実は非常に小さいまとまりとして考えられています。日本の縄文が1万年間ずっと続いたということも、世界遺産関係の人からすると、それは実は懐疑的なのです。普通は1000年、2000年で別な文明に変わるだろうと言われていました。それが縄文の場合は、もちろん縄文前期とか中期とかという違いはあるにしても、長い継続性があるのだ、島国なのでありうるという話をしています。その説明をするのに付け加えて、じゃあ日本列島全体も、ということになると、時代も地域も拡大して説明することになるわけです。そうすると、なかなか説明しづらいということが実際にあります。北海道・北東北という、同じような土器を作る文化圏、同じような生活スタイルの文化圏というのが、例えば、中国だと西安の近くの仰韶文化とか、いくつかあります。それぐらいの地域的なまとまりというのがちょうど円筒土器文化圏の広さと合うわけなのです。つまり、一つの文化圏、そして長い歴史というものを説明するときに、やはり、あそこもここも、というのは受け入れられなかったということだと思います。つまり、論理性が欠如するということです。これは世界遺産に登録する一つのテクニックであって、本州の他の遺跡に価値がないということは全くないです。むしろ他の文化、豊かな文化というのがあるということを示せると思っています。

**西山：**ありがとうございます。ちょっと私も生半可な知識かもしれませんが、やはり本州のほうに行くと弥生文化が入ってくる。まさに北海道では、続縄文から弥生という時代を経ずにアイヌの文化期に入っていったという部分で、その考え方、要するに非常に長い1万年とも12000年とも言われる縄文が続いたということですね。気候的な問題もあるのですが、その辺である程度区別ができたというふうにも理解していたのですが、その辺はどうなのでしょう？要するに、弥生に移行しなかった、縄文的な文化がアイヌの時代までずっと続いたという意味においては、南や西のほうとはある程度の線が引けるのでは、という考え方はなかったのでしょうか。

**青野：**そうですね。やはり、歴史的な背景というのは大きいですね。特にアイヌの人たちに繋がる基となる文化なのだということで、これは海外の方たちに説明する時に、すごい説得力がありました。ただ、そんなに実は推薦書ではそこを強調してはいないのです。それはなぜかということ、北海道は当然アイヌの人たちに繋がるという考えではあるのですが、

青森・秋田・岩手というのは、そこまででもないということもあって、一つを強調すると一つが説明つかないということもありました。ここも非常に難しいところなのですが、推薦書ではそこまでは説明できませんでした。ただ、これから活用ということを考えていくときに、やはり北海道の歴史を正しく理解してもらう。それは、縄文、続縄文、擦文というような文化の流れです。文化は変わりつつも受け継がれていきますよね。縄文＝アイヌではありません。でも、受け継がれていった文化と歴史というのを理解してもらうというのは、非常に大事だと思っていますので、これは欠かせないところだと思います。

**西山:** 本当にご説明が難しいものを無理やり聞いて大変失礼しました。やはり一番根幹となるストーリーをしっかりと説明するために、あまり他の説明をむしろ加えないほうがいい。こちらを立てるとあちらが立たずというようなこともなる。それもやっぱり世界遺産の戦略であったと理解できました。

一方で、これから北海道として、今日はまさにそのためのフォーラムだと思うのですが、世界遺産をいかに活用するのか、その一つのインパクトをどのように地域として受け止めるのかということと考えれば、申請時に遠慮して書かなかった部分を北海道の中で大いに展開していくというものはあり得るのだということ、私も強く感じました。ありがとうございます。

#### 4-2 厳しい気候の寒冷地に定住したわけ

**西山:** 他にも、私のほうでいただいた質問を見ていたのですが、これは小野先生に伺います。視聴者の方からのご質問で「なぜ厳しい気候の寒冷地に定住することになったのでしょうか。また縄文人と呼ばれる定住した人たちは、どんな人たちだったのでしょうか。和人だったのか、アイヌだったのか、オホーツク人だったのか」という書かれ方をしています。まず一つは、これだけの濃密な竪穴住居群が生まれたということから、厳しい寒い気候の中に、なぜそれだけの人たちが集住したのだろうかということについて、小野先生、ご説明いただけますか。

**小野:** そうですね。青野さんの話の中でも定住の話が出ましたが、通年の定住ということで貝塚の事例を挙げておられました。しかし標津遺跡群を中心とした根室海峡沿岸は、根室半島の一部を除いて貝塚は出てこないのです。自分はむしろ、通年でそこががちり定住していたというよりは、根室海峡の沿岸を広域に利用するような、移動しながら、拠点はあるのだけれども、結構流動的な暮らしをしていたような、縄文の頃からそういう暮らしがあったのではないかなというイメージで思っています。もしかしたら寒冷地ならではのそういった暮らし方もあったかもしれないという印象をもっています。これはもう標津遺跡群のローカルな部分の話になりますが、それが多分一つ目の質問の答えとなるでしょう。

2つ目は、縄文人と呼ばれる人たちが、どういったルーツなのかというところですが、これは和人もアイヌも基本的には縄文がベースにあると思うのですが、その後も人種的には一緒だけれども、多様な文化の混じり方というか、交流の仕方の違いによって、本州では弥生文化が、北海道では続縄文文化へと展開し、大きく2つの道に分かれていきます。これがその後の和人となっていくか、アイヌになっていくかという、大きな分岐点になったと思うのです。さらに標津遺跡群においては、縄文文化をベースにした続縄文、擦文文化の人たちと、より北方の地域から移住してきたオホーツク文化の人たちとの接触の場となり、トビニタイ文化みたいな特徴的な文化が育まれたりします。北海道は広いので、いろいろな文化が交錯するような、そういった場の遺跡があるというのが標津遺跡群の特徴かなと思っています。答えになっていないかもしれないですが。

**西山:**ありがとうございます。これも私の生半可な知識ですが、オホーツク、カムチャッカ、北の方から人が来られたと、仮にそういうことも考えられるわけですよね。必ずしも南から北に行ったわけじゃなくて、北から人が来たという考え方はできますよね？

**小野:**オホーツク文化については、そう言えると思います。あと、縄文の頃も、縄文時代前期の石刃鍬文化などは、北から入って来た文化なので、北海道だけでなくと暮らしていた人だけで成り立っていたわけではなくて、時代のいろいろな節々に結構外から入ってくる人たちはいたと思いますね。

**西山:**質問された方のイメージだと、多分だんだんと北に人が移っていくような発想かと思いますが、実はより北の人からすれば、むしろ北海道は温暖というか、より住みやすい場所だったかもしれないということもあり、またそういう方々が突然いなくなるという、オホーツク文化に関わる謎みたいなものが、ある意味非常に面白いと思います。先ほど青野先生のトリビアの話ではありませんが、いろいろな考えるべき、我々がロマンを感じたり謎を感じたり、不思議を感じたりするような情報がたくさん秘められているのだろうと、私も感じます。

#### 4-3 縄文の精神文化の魅力を発信する

**岡田:**ちょっと視点を変えてみます。「北の縄文」を中心とした北海道の縄文の遺跡や文化というのは、観光の文脈で考えてみたとき、訪れる人にどうやってその魅力を発信するかというところが一つポイントになると思うのですが、視聴者の方からのご質問で、「縄文の人々の精神性が、現在の日本人にも受け継がれているという話が青野先生の発表でありましたが、その点を少し詳しく教えていただけると嬉しいです。また、いわゆる海外におけるアミニズムと縄文のアミニズム、精神文化は違いありますか？」という質問が来ています。

私からもこれに関連して、精神文化はなかなか目に見えません。いわゆる遺跡を復元するのは異なり、精神文化は復元などが難しいなかで、それを初めて北海道を訪れた、あるいは初めて日本を訪れた人に伝えるときの工夫とかポイント、もしあれば併せて教えていただければと思います。

青野：はい、精神文化の説明をどうすべきか。難しいですよ。現在にどう繋がっているかという話も、本当に一言では絶対に言えませんよね。簡単に言えば言うほど間を端折ってしまうので誤解を生じてしまうからなのです。北海道の縄文の文化がいろいろな時代を経て、変容しながらアイヌの人たちに受け継がれています。例えば、物送りという儀礼がある。それが受け継がれていっているというのは、もちろん儀礼を辿っていくと証拠もあるわけです。例えば、熊送りですとか、アイヌの人たちが熊の頭骨に穴を開けて霊を逃がすのだといいます。そういう方法を、熊の骨に穴の開いたものがいつから出てくるのかということをやらずと辿っていくと分かるわけです。これは慶応大学の佐藤孝雄先生という方がやられていることですが、熊送りの儀礼を辿っていくと、やはり12～13世紀までは辿れる。ただ、頭に穴が開いたものは縄文までは遡らないのです。それでも、統縄文期の遺跡からは熊の彫刻がされたスプーンが出てきたり、縄文人は熊の犬歯を大切に扱ったりというような、形を変えながらやはり移って行っているわけです。そういうことを考えていくと、本州の文化も、例えば、縄文土器に付いているカエルやヘビの文様も同じです。例えば、諏訪神社の正月の行事にカエルが登場したりするのです。そういう神道の中に実は生きている可能性があるとか、そういう物証を積み重ねていくということが大事になります。なので、今ここでパツと言うような、軽々しく言うようなものではないということですね。ただ、繋がりには当然あると私は思っています。また別の機会に話をさせてください。とりあえずそんなところでしょうか。

海外との違いですが、例えば、動物に霊魂があって、それが飛んでいくというような時に、頭に穴を開けて天に返す、という所が圧倒的に多いのですが、でも、エスキモーなんかだと、例えば、アザラシの膀胱に霊があると考えて、狩猟した後に氷の穴から膀胱の部分だけ切り取って流すのです。そうすると、海の底にイヌアという霊魂が戻って、そしてまた生まれ変わって帰ってくるのだという考え方があります。ですので、天上に上がるという考え方と、海の底に沈むという考え方の違いや、頭に霊魂があるのか膀胱にあるのかといったような違いなどは確かにあります。ただ、根源的な部分は似ている。狩猟採集文化の特徴的なものだと思います。

#### 4-4 自然遺産、自然環境と縄文

岡田：次に、小野園長にご質問が来ております。かつて釧路にお住まいだった方からの質問です。この方は、「非常に広大な阿寒釧路地区の保存には前田一步園のご支援があったので

はないでしょうか」というコメントとともに、「発表の中でも見せていただいたように、貴重な縦穴遺跡群と同時に、当時人々が暮らしていた時に見ていた環境に近いものが現在でも残っていて保全されているという状況だと思うのですが、今後こうした文化、そしてその文化が育んだ環境というのを総合的に保全したり活用したりしていく、地方行政との連携とか展望がもしあったら教えてください」ということです。

**小野：**多分視聴者の皆さん、みんなご存知だと思うのですが、北海道東部北部の魅力と言ったら、地元行政の職員も皆、自然環境を第一に挙げますよね。これはもう行政、地方行政、うちの標津町も含めて、みんなそうなのです。ただ、実際にはそういった自然の中にいい遺跡が残っているのですが、なかなかそこに気づいてもらえないという現状はあります。何とかそこに風穴を開けたいなと思い、ずっといろいろな活動に取り組んでおりました、特に隣町の羅臼とか斜里、世界自然遺産に知床はなっているのですが、この知床半島には縄文遺跡も当然ありますし、本当はもっと自然の中にきちんと縄文からの文化というものがあるはずなんです。なので、自然だけではない、きちんと当時の人の生きた証、そこも含めた自然の価値というところに目を向けていけるようなことを、なんとかそこに行政も含めて目を向けてもらえるように、今いろいろ試行錯誤しているところです。

**西山：**今の話について1つだけ。知床が世界自然遺産になった時も、本当はあそこにはアイヌの文化との濃密な関係というものがあり、単に純粋な原生自然だけではない、アイヌ文化というもの、知床半島におけるアイヌの人々の暮らしとか、そういうものを本来は世界遺産の価値付けに入れていけるのではないかということがありましたが、結局はそれが全くなされなかったという話もあります。先ほどの小野先生の動画をずっと見せていただきながら、本当に美しい動画だし、愛に溢れるというか、この竪穴群という一見草に埋もれたら一切見えなくなってしまいそうなものを、雪解けの景色の中で見せる映像。まさに自然の中に、もうはるか昔の遺跡ですから本来であれば完全に消えていてもおかしくないものが、今も目に見える形で表現されていました。ちょっと工夫をすれば目に見える形にできるということの驚き、そして、私は九州の出身なのですが、北海道に来て本当に自然の川の美しさというものにいつも大変感銘を受けます。まさに原生的な自然、そういう自然と人々が共生して暮らした姿というものをカメラの映像などで見せてもらおうと、本当に、道東・道北といえば自然だ、みたいな考え方というのは、北海道の観光資源をある意味狭めてしまっていると思うのです。やはり、そこに人が暮らしたということに思いを馳せてみる自然と、ただ野生動物が闊歩していて、遠くから望遠鏡で見るような自然とは違うと思うのです。そういう意味で、本当にポー川自然公園の魅力というものを、私もこれからどんどんいろいろな所に説明させてもらいたいなとも思いました。まさに自然と人というものの関係が、これから北海道に、まさに世界遺産を目指して訪れて来るような人たちに対して大いにアピールすべきものではないのかということ、今お話から伺いました。

#### 4-5 今後の遺跡の整備や訪問のルールはどうあるべきか

**岡田:** ありがとうございます。そろそろ閉会の時間も迫ってきたのですが、最後の質問をパネリストの皆さんに、一言ずつお答えいただければと思います。

今回のユネスコ登録で北の縄文遺跡群を中心とする北海道の縄文文化について注目が集まって、より訪れたいと思う人が増えると思われそうですが、パネリストの皆様が考える今後の遺産、あるいは遺跡の整備や訪問のルールはどうあるべきか、もしご意見があれば教えてください、ということです。

**青野:** 訪問のルールは当然、遺跡・遺産を壊さないということですよね。世界遺産は、日本の国が世界にこの遺産を永遠に残すのだと約束した場所ですので、これは来訪する者のルールとして必ず守ってもらいたいことだと思います。それ以外は、どんどん自分なりの楽しみ方、学び方をしてもらえればいいのだらうと考えます。というのは、「そんなに来られると遺跡が壊れてしまう」というようなものでもないと思うからです。もちろん管理というのは各自治体がしています。その範囲内でどんどん活用してもらいたいと思いますね。

ちょっと話はズレますが、先ほどの小野さんの「道東は居住の仕方が違うのではないか」という話がありました。移動しているのかもしれない。こういうのも非常に魅力ですよ。石狩低地帯を挟んで、定住型の貝塚を作る文化と移動型の縄文文化があるのだよ、とお互いを紹介しあうことで、今回は道南に来たけれども次は道東に行ってみよう、その逆もあるというような、やはり来た方にもう一度来てもらう、別な所も行ってもらうという姿勢が大事じゃないかなと思います。最後なのでもう一つだけ。遊び心の面で、例えば、標津の堅穴群のくぼみに残雪が残っているのをみると、私はワッフル状の焼き菓子を思い浮かべます。ワッフルに生クリームを塗って、堅穴住居のくぼみに残る雪を表現したお菓子なんて、いかがでしょうか。

**小野:** 今のお話を聞いて、僕は逆に堅穴の白いプリンみたいなのを作ったら売れるのではないかなとちょっと考えました。

標津遺跡群は世界遺産ではないのですが、文化財の保存活用計画を作っているなかで、遺跡ってなかなか分かりにくい資産で、やっぱりその価値を伝えていくのが重要だと思います。ただ大勢の人が来て見せればいいというわけではなく、そこをどう伝えていけるかというのが、すごく悩ましいところです。やっぱり一番いいのは、しっかりした価値を伝えられるガイドの人が育っていくようにしなければいけないなと思っていて、そこに一生懸命いま力を入れてやっているところです。従来はボランティアガイドみたいな形でやっていたところもありましたが、ただそれも限界があって、多様な価値観を持った人が来るなかで、遺跡の価値をその人に合わせて伝えられるかなり高度なガイドみたいなのを育てていく必要があるなと思っています。多分、遺跡の遊歩道整備とか堅穴住居の復元というよりも、

そこが一番遺跡の活用、保存整備のところでは重要な役割になっていくのかなと感じています。

## 5. おわりに

西山：最後にまとめも含めてお話をさせていただきます。本日の青野先生の基調講演の中で、私が一番心に残ったのは、今回の世界遺産登録は何だったのかということです。それを考えたときに、私は、先ほどの質問で逆のことを聞いたのですが、やはりしっかりとあるエリアを切り取ってクリアなストーリーで、世界に対し、国際社会に対して日本の縄文文化というものをしっかりとアピールし、説明して世界遺産にしたわけです。そもそもは、上部構造物も残っておらず、見た目で見分りにくい日本の縄文遺跡、縄文の価値というものを、これだけのきちんとしたストーリーを作り上げることで、はっきりと世界に示したということです。それを最も短い言葉で言えば、まさに「定住する狩猟採集文化」です。パッと言葉を聞くと「そうか」と思うのですが、実はこれがどれだけ世界史の中で特別な意味を持つのかということ、今回の世界遺産登録は示しました。これによって日本に縄文という、縄文というのは JOMON と書くのかもしれませんが、縄文という文化が固有名詞としてあるという、しかもその性質が何なのかということが世界に発せられたということ、私は、本当にこれは大きなことだと思います。

火焰式土器とか素敵なビーナスのような縄文の遺産もありました。当然ながらいろいろな地域で縄文時代のピークがあり、非常に優れた、今見ても惚れ惚れとするようなものが、北の縄文以外の場所にもあるということをお今日は教えていただきました。ですから、まずは縄文が発信されたということに我々は一番の喜びを感じるべきでしょう。縄文というものに関わることでできる人々には、これを機会に改めて自分たちの身近にある縄文文化がどのような特徴を持っているのかを再考してもらいたいものです。北の縄文という一つの物差しができたわけですから、それに対してどう違うのかということをお説明することによって、妙な前置きは排して、海外の人にも説明できるようになったのです。

そんなことを理解するうえで、小野先生が話された質の高いインタープリターやガイドのような方が必要だということです。まさにそうなのですが、青野先生の「紹介しあうことが大事」という言葉が、私はとても重要だと思いました。とかく観光開発というのは、自分の所が儲かれば良いと考えがちで、「うちに来たらよそこには行かなくていい」と言って囲い込みたがるのが観光開発の悲しいところです。ですがそうではなくて、ともかく縄文という価値が世界にきちんとした形で示されて、それとの関係で自分たちのさまざまな遺跡が説明できるようになったということは、逆に言うと、相手を説明できるようになるということなのです。自分の所だけの足元を見つめて深掘りする説明だけではなく、やはり他を知ることによって自分たちの遺跡の価値というものを相対化できる。こうしたことを、今日いただいた両

先生のお話の中から、私は大いに学ばせていただきました。

青野先生の後半のとても面白い蝦夷三官寺の三カン寿司の話とか、お菓子づくりの考古学者、この方はお菓子づくりが本業なの考古学が本業なのか分からないままでしたけれども（笑）、とても面白い、逆に言うと、謎が多いからいろいろとそれをまた楽しむ方法もあるということ、大きなヒントとしていただけたかなと思います。

最後に、自分が用意した資料が1枚だけあり、お見せしたいと思います。「縄文のまち ハンドブック&スタンプラリー」という面白いハンドブックを何年か前に入手したのですが、そのなかに北海道の遺跡分布の地図があるのです。多くの方はご存知だと思いますが、これだけの数の遺跡発掘は、研究目的の調査調査だけでは到底できません。実は1970年頃に文化財保護法が改正され、「開発をするときには、遺跡がありそうなところは必ず事前に発掘調査をしないと開発してはいけない」という、世界的に見てもユニークな制度ができました。道路を造るとか、市街地を開発する、建物を建てるというときは、埋蔵文化財のある可能性がある場所、包蔵地に関しては、場合によっては開発者が負担して発掘調査をやらなくてはならないという、この面白いルールがあるせいで、いろいろな所で開発が起きるたびに縄文に限らずさまざまな時代の遺跡が見つかるということが全国で起きています。

1970年頃に法律ができてから、今でも毎年1万件ぐらいの発掘が全国で起きているらしいのですが、ただそれらのほとんど、99%が学術的な発掘ではなく開発に伴う緊急発掘です。ですから、この広大な北海道を見渡した時に、実はこれまでに発見されている遺跡というのは、道路を造る時に発見されたり、市街地を開発する時に発見されたりしたものがほとんどなのです。別の言い方をすると、まだ他にどれだけ貴重な面白い、びっくりするような縄文遺跡が北海道の中に隠されているのか分からないのです。秘められているから分からないということです。

他の種類の遺産、例えば、お城やお寺の建物のように地上に建っているものは、どれだけあるかというのはみんな分かっているのですけれど、遺跡というのは地面の下にあって掘るまで分かりませんので、とんでもなく未知数なものなのです。それでも、21世紀のこの時期に、ある意味、戦略を立て、縄文という文化をそろそろ世界に出していこうということで世界遺産リストに登録しました。しかし、縄文遺跡は今後どんどん皆さんの足下から発掘されていく可能性があるということです。そう考えるだけで非常に夢が膨らみませんか。特に、北海道のように開発されていない場所が多い場所においては、今後、温暖化も進み日本の中心がどんどん北に移ってきたら、いろいろな意味で新しい縄文が50年後100年後に発見されて、もしかしたら今の17資産ではない別の資産と入れ替わったり、もっと数が何十にも増えたりしているかもしれない。こんなことを思うわけです。ですから、そういう意味では、今回の縄文の世界遺産登録というのは、さまざまな地域にとっての大きなチャンスであり、とっかかりになると考えます。

その第一歩をやっと踏み出してくれたのだと考えて、我々は大いにこれを活用していきたい。観光関連の方、先ほどのようにグッズを魅力的に作ることも大事ですし、質の高いガ

イドやツアーを組んで、そういう人たちを満足させリピートさせていくということに、本日のフォーラムの話題を通じていろいろな可能性を感じていただけたのではないのかな、そういう 2 時間になったのではないのかなと思います。勝手ながら、企画を思いついた者として、今日は充実した気持ちでこの会を閉じることができるかなと感じます。本当に両先生には貴重なお話をありがとうございました。これからも、どんどん新しい魅力を発見して頂き、我々にも伝えてほしいなと思います。

**岡田：**1 万年にもわたる多様で非常に濃密な縄文文化と、そして北海道の観光振興、地域まちづくりについてさまざまなポイントをお話いただきました。登壇者の皆様、改めてお礼を申し上げます。第 1 回目のオンラインフォーラムはこれにて終了したいと思います。ありがとうございました。